



僕の原稿用紙 石原良純

親父の書斎の大きな机の真ん中には、いつでも原稿用紙の束が、隅をキチッと揃えて積まれていた。

群青色のマス目の四百字詰め原稿用紙の左下に印刷された「石原用箋」の文字を見ると、親父の職業が作家なのだということが、子供の僕にもなんとなく理解できた。

俳優稼業の僕も、月刊誌のスポーツエッセイに始まって文章を書くようになっていった。そのうちに、夕刊紙に連載していたエッセイがまとまって、単行本を出版してもらえることにもなった。

僕の初めての著書『あそびに行こうよ コール』（一九九二年）は、友人、先輩諸氏との交友録を電話での仮想会話に仕立てたもの。全百一人の通話相手は男性

ばかり。「さすが良純、色気がない」と思われるだろうが、さにあらず。女優、女性タレント、編も試作したものの、ウチのタレントは、ヨソの俳優さんと親しく電話などしません」と所属事務所の許可が取れない。遊びは遊び、仕事は仕事と芸能界の厳しさを知った一編でもあった。

さて、初めて入った原稿料を何に使うか思案する。出版記念パーティーをやって友達連れて温泉にでも出かけたらパツと消えてしまう。

深夜、シーンと静まり返った部屋での原稿書きは地味で孤独な作業。煌々とした明かりに照らされて、大勢の人に囲まれた明かりのテレビ番組創りとは正反対だ。監督や共演者に気兼ねのいらぬ個人プレーは、総てが自分の思いどおりになるという利点はあるが、あの机に向って重苦しい時間の記憶を、せつかくだから形に留めておきたいと考えた。

僕が買ったのは、九十センチ×百八センチの大きな特注机。そして、僕用の原稿用紙も作ってもらった。

百枚で一冊の、4判サイズ縦型の原稿用紙は三百字詰め。ウグイス色のマス目の左上の大きな余白に「YOSHIZUMI SHIHARA」のローマ字表記と共に、事務所の所在が記された。

愛用の原稿用紙に鉛筆書きは、書き損じて紙を無駄にしない知恵。消しゴムの消しカスが机の上に溜るのを小学生以来だとおもしろがったりもした。

ワープロからパソコン文化の到来とともに、残念ながら原稿用紙の束は広い机の片隅に追いやられてしまった。

でも僕は、パソコン画面に並ぶ文字が今一つ信用できない。所詮パソコンの文字は電気の点滅。コードを引き抜けば消えてしまう。その時限りのもの。浮心上がる文字の向うに、無数の可能性があるが実体がない。実体のないパソコン画面をいくら見つめていても考えはまとまらないから、僕は必ずプリントアウトした紙の上で推敲する。すると、文章の中でいらぬ物といる物の区別がハッキリ見えてくるものだ。

子供の頃、親父の机でいたすらして、原稿用紙で指先をピツと切ったことがある。この紙の切れ味が、文章を書く時の強い味方となっているわけだ。



石原良純(いしはら・よしずみ) 1962年神奈川県生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業。82年松竹富士映画「凶弾」でデビューの後、俳優・気象予報士として舞台、映画、テレビなどに幅広く活躍。7月6日よりテレビドラマ「刑事部屋〜六本木おかしな捜査班〜」が、スタート。

Let's think together! 地球温暖化を防ぐ私たちの小さな一歩

化石燃料の使用削減をめざして。できることから行動しています。

地球温暖化防止に身近なところから取り組もうという動き『クールビズ』が話題になっています。私たちがオフィスで“ノーネクタイ、ノー上着”を実践。冷房温度を高めに設定し、省エネに取り組んでいます。



エネルギーの利用という点では、紙を作る際には多くのエネルギーが使われています。そのため、私たちはエネルギーの使用削減に早くから取り組んできました。とりわけCO₂の発生源となる

重油や石炭といった化石燃料の消費を抑える取組みに力を注いでいます。その一つが木材チップからパルプを製造する過程で生じる廃液のバイオマス燃料としての利用です。現在、製紙産業全体のエネルギー消費量の3分の1が、この廃液によって賄われています。また、再生が困難な古紙と廃プラスチックによる固形燃料RPFなどの廃棄物エネルギーの利用にも、積極的に取り組んでいます。

家庭で、オフィスで、若紙リサイクルの輪、広げよう



今回は9月8日号、二宮清純さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>